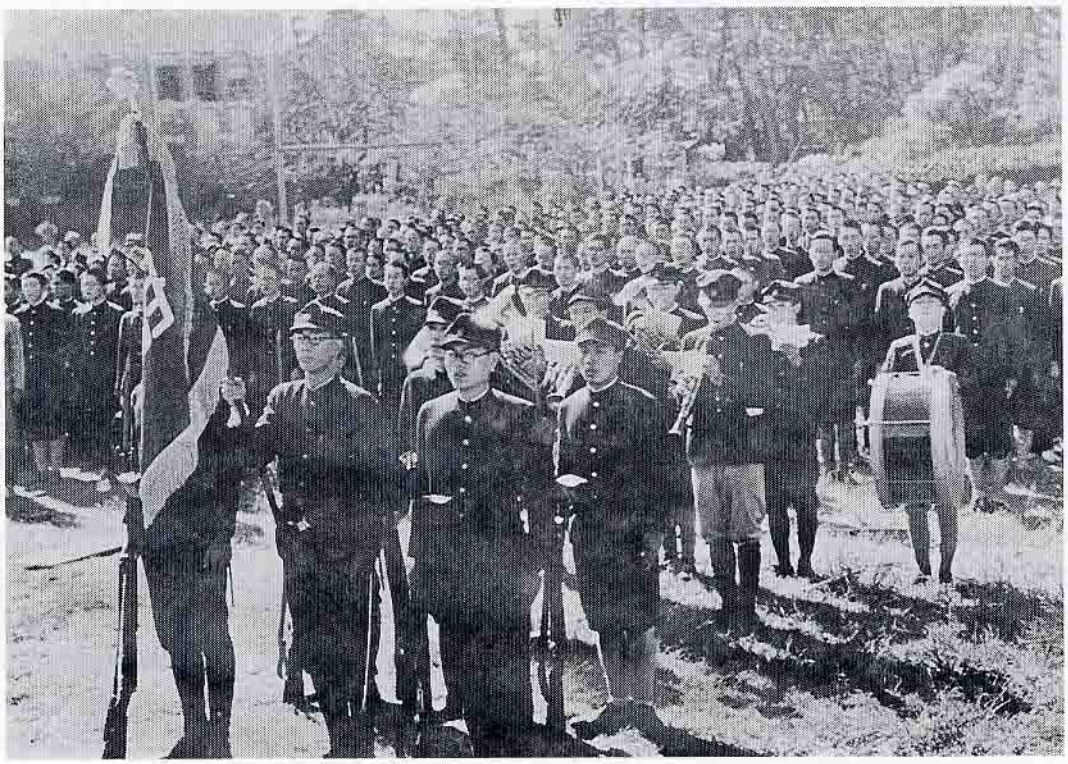
ISSN 0919-4339

九州大学
大学史料室ニュース

第9号　1997.3.10.

目　次

終戦のころ、そして箱崎 …… 2
国立大学等における公文書の管理と保存(2) …… 4
九州大学史料収集・保存に関する委員会名簿 … 6
受贈図書一覧 …… 6
大学史料室日誌抄録 …… 8



学徒出陣壮行会（西日本新聞社提供）

昭和18年に入って戦局が重大な局面をむかえると、政府は同年10月、戦時態勢強化のために学生の徴兵猶予を停止し、20歳の徴兵年齢に達した学生の召集を決定した。いわゆる学徒出陣である。このため、理工系および医科等の徴集猶予のある学生を除いて、陸軍は12月１日、海軍は12月10日に、それぞれ入営、入団することになった。九州大学では、10月17日に出陣学徒激励の大運動会・音楽会・映画会を開催し、19日には工学部運動場で全学壮行会を挙行した（上写真）。戦時中の大学の様子を伝える貴重な写真である。

終戦のころ、そして箱崎

古田　鷹治

先日、大学史料室から戦後初期ごろのこと、箱崎のことを書くようにとの依頼をうけた。その任ではないと尻ごみしたのであるが、このころのことを書いて置くのも、或いは長く勤めた者の義務でもあろうかと思い直し、非才の身をかえりみず、戦後の乏しい記憶をたぐり寄せながら、思いつくままに筆を執らせていただいた。

私は昭和20年9月、志願していた海軍から復員したが、その月から当時まだ農学科であった農業経済学講座に勤めることになった。爾来、平成3年3月に定年退官するまで、45年の長きにわたって、一貫して農学部にお世話になった。このように長く勤務しようとは、そのころ思いもよらなかった。

当時は終戦直後のことで、博多中心部は一面の焼け野原、家を焼かれた人々は、防空壕の中や、焼け跡のバラック小屋に住む人も多かった。もちろん物資は極度に不足し、ヤミ市に人は群がり、荒廃と虚脱の時代であった。大学とて例外でなく、爆撃こそ免れていたが、建物はかなり痛み、窓は方々破れ、陽にやけ引きちぎられたカーテンが、敗戦の哀れを誘うかのように、風に揺れていた。終戦になって一人また一人と、大きなリュックを背負った職員や学生達が復員してきた。帰って来ても住むに家のない職員も多く、宿直室や教室の片隅に寝泊まりする人もかなりいた。先ず生きること、喰べることに追われる日々であったが、あちこちの宿直室から、朝餉、夕餉の煙りが上っているのをよく見かけた。イモや豆の煮える匂いが、廊下を伝ってもきた。今では考えられないことだが、現在の箱崎キャンパス内に住居を構える人もあって、筥松校区九大町という町内が出来たのもこのころであった。確か35世帯あったと聞いている。巷では長い戦争から解放され、平和の喜びを噛みしめるかのように、人々は“リンゴの唄”のメロディを口ずさんでいた。

復員学生達が続々と大学へ戻ってきて、どこの講座も少しずつ賑やかになってきた。価値観の逆転する混乱の中であったが、周囲の学生達の語らいは生き生きとし、目は輝いていた。これは救いであった。苦しい中でも研究活動復活の兆しを、そこはかとなく感じるようになった。陸士・海兵出身の学生も多く、陸海軍のコートを纏って登学する者もいたが、陸軍の元参謀の学生もいて、年令的には師弟逆転のところもあったようである。

食糧・物資欠乏の時代であったが、コンパはよく開かれた。例の三畳閣であったり、下宿の部屋であったりした。米は学生達が田舎から、野菜は私が親類の農家から貰った。マッカリは地元の私が、然るべきところから買ってきた。少しのアルコールに学生達は気炎をあげ、日本農業を語り、天下国家を論じていた。意気軒昂とはこういうことをいうのであろう。

日本に学徒出陣があったように、連合軍にもあった由で、終戦直後、工学部航空工学科の建物が、学業半ばの米軍学徒兵の再教育の場になっていたようである。日本人学生に配慮したのか、長くは続かなかった。

一方、電力事情も悪く、減圧しての送電のため、電球にポッと色のつく程度の明るさで、ローソク送電とはよくいったものである。そのころ、電気がまともに灯っていたのは、駐留軍関係、警察、駅それに図書館位のもので、旧図書館はいつも満員で、灯りをめがけて飛び込む虫を払いながら、今までの空白を取り戻すべく学生達は読書に没頭した。箱崎駅は夜になると、多くの若者達が集ってきた。正常に灯る駅舎の灯りで書物を読むためにである。そういうことからいえば、現在の冷暖房完備の附属図書館は、まさに天国のようなもので、もっと活用すべきではなかろうか。勿体ない限りである。それから戦時中に疎開させていた図書類を、人も車も喘ぎながら、八木山越えで引揚げに行った。持ち帰った図書類を演習室に積みあげ、盗難予防のため何日も寝泊りしたこともある。

また、戦後あらゆる職場で労働組合が出来た。九大でも職員組合が組織され、今考えれば嘘のようだが、学部長、事務長以外は全て組合員という単組もあって、新しい時代の幕開けを感じた。

戦後しばらくして農業調査も始まるようになり、私は当初の五年間あちこちの調査に参加した。海外引揚者の開拓入植は、国の政策として重要視され、主として小倉の平尾台、大分の日出生台、阿蘇山麓の肥後大津、太刀洗飛行場跡などの開拓地や、遠く霧島山麓、近くは福間町など方々に出か

けた。このころは、出張するにも汽車の切符も自由に入手出来ず、公用の特詮(特別詮議)切符の割当を貰わねばならなかった。当時一般の人々は、長蛇の列を作って買うのであるが、それも手に入れば上等である。列車の本数も少く、日に何本しか走らず、買い出しの人や荷物でどの列車も超満員である。戦後のニュース映画そのものであった。ローカル線では、列車の箱も貨車を改造したものもあった。窓も無く薄暗い車の中央に、ロープが何本も下がっていて、これが吊皮の代用だが、何人もの人の汗やアブラや手垢でズルズルしていて、決して気持ちの良いものではない。しかし危ないので摑まらない訳にはいかなかった。汽車の切符だけではない。研究用動物の飼料にするフスマ一俵でも、実験用セメント一袋でも、役所の証明書を貰わねばならなかった。聴取調査表は、戦時中のものを使うので、劣悪でプリントの写りも悪く、紙は黒くて薄いし、鉛筆は芯が硬くて紙を切り、消しゴムは石のようなもので、消すと紙が破れたりして、泣き出したくなることもしばしばであった。電話も無く、台地の上の方と連絡するのに、海軍で覚えた手旗信号が役立ったこともあった。

戦後の大変苦しい時代であったが、私にとっては全てが新鮮で若くて張り切っていたので、辛いと思ったこともなく、充実した日々であったと今懐かしく思い出している。

話は変わるが、私の住む町は、筥崎宮の東側にあって社家町というが、昔から九大関係者の多く住む、静かな環境の町であった。私を農学部に就職させていただいたのも、家の向いの伊藤兆司教授である。町内には学生も多く間借りしていたが、私達の子供のころは、九大生に対しては先生と呼んでいた。親がそのように教育した。三月には各家の玄関前には「貸間あり」の札が一斉に下がり、四月初めには間借りは完全に詰まった。

箱崎松原の一翼を担った箱崎キャンパスの松は、工科大学の出来たころの明治45年３月の九州帝国大学会計課の調査では、その立木数は7,063本となっている。学生達は人生の最も多感なときを、白砂青松のこの箱崎の地で過ごし、清らかに松籟を聴きつゝ巣立っていった。昭和56年の農学部須崎民雄教授の調査によると、同じく工学部地区の松は、クロマツ241本ということである。今昔の感を強うする。

この松原を北側に、南に開けた一帯が現在の箱崎キャンパスであるが、この一帯が明治期日本三大蔬菜地帯の一つとして、全国に声名をはせていた蔬菜畑である。構内は地蔵松原、松原下、地蔵前、景福寺、細道、踊堂、北海門戸、浜小路、中新立、浜新立などと、美しい名前の字があるが、中でも北畠（工学部グランド辺り）が最良圃であったといわれる。当時の箱崎には灌水用のハネツルベが約500もあって、その林立する様は、なかなか壮観であったと記録にもある。20数年前に、かつてこの構内を生産の場としていた農家の古老６名の方に来学願い、座談会を開いたことがある。80才に近い古老達は、「来る日も来る日も、ハネツルベで水を汲みあげては、重い水槽を担いで灌水し、肩は腫れ、すり破れ、血が滲んだ。自分達は肩で箱崎蔬菜を作ってきた。」と、口々に語られた。その古老達も現在ではすべて物故者である。もっといろいろ伺っておかねばならなかった。

第二学生集会所で生活する学生達（昭和22年頃）

記念講堂前の築山は、かつて箱崎の農民が、緑蔭に畑仕事の手を休めていたであろうと思われるが、ここは往時、筥崎宮の社坊、赤幡坊が管理していたといわれる小松山重盛院還国寺の跡である。ここに祀られていた地蔵尊は、勝軍地蔵といい、平重盛公が宋より持ち帰ったと伝えられる。工科大学の設立に伴い、現在では県道を隔てて、工学部横に移し祀られている。なお農学部構内にあった避病院も、塔本橋東に移っている（現育児院)。

50年も前のことを断片的に書き綴っているので、系統的でなく読みづらく、また大切なことが欠落し、記憶違いもあろうかとも思われる。徒らに紙面を費やし恐縮に思うが、何卒ご海容いただきたい。九州大学の、さらなる発展を祈ってやまない。

（元農学部講師）

国立大学等における公文書の管理と保存 (2)

有　馬　　學

大学における文書館の必要性については前述しましたが、文書館の設置を考えた時、まず問題になるのが公文書の移管システムであり、これが確立することなしに、大学文書館は成立しません。そこで、公文書の収集・保存と文書管理について、大学文書館という観点から、その現状における問題点について述べてみます。

まず第一に、文書管理規程についてですが、実際の現場では厳密に文書管理規程どおりに文書が扱われているわけではありません。例えば永年保存文書については、規程上では事務局の文書担当課といったところで一括して保存することになっているところが多いのではないかと思われます。しかし、実際には、多くの場合その文書の発生した課に置きっぱなしになっているのではないでしょうか。つまり、現在の文書管理規程では、その機関が現在所有しているはずの文書の全貌、実態というものを全く把握できないということになります。

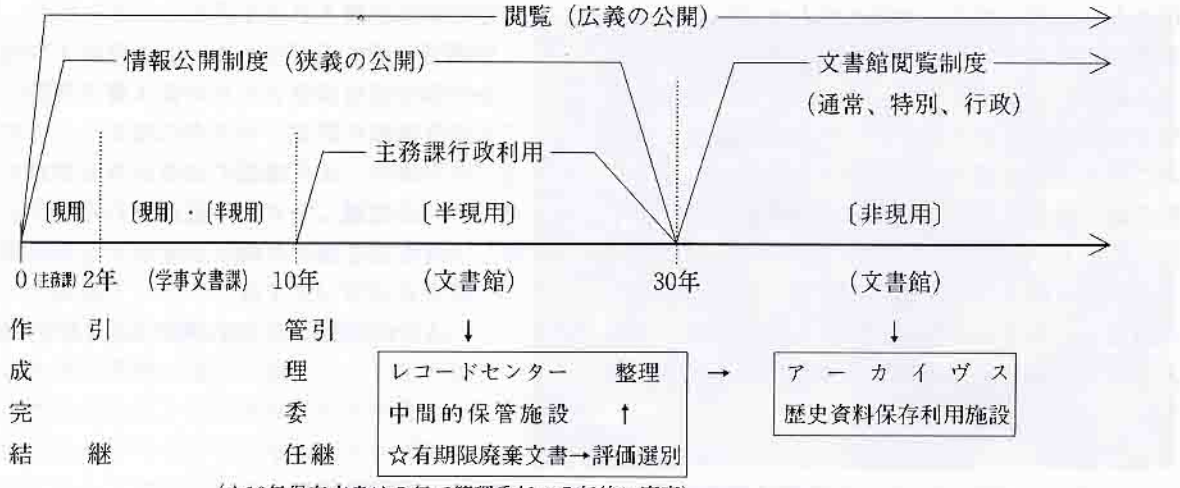
次に、有期限文書の廃棄の問題でありますが、この点については、保存期限がきたものについては、基本的に直ちに廃棄という処置がとられるため、公文書館に移管できなくなっていること、また保存期限が満了していない文書についても自然に廃棄されることがあるという問題があります。さらに、大学の場合、公文書の実態を把握したり収集するのを困難にしている原因の一つとして、本部事務局と各部局の関係という問題があります。本部事務局についてある程度把握できていたとしても、部局については学部の自治といったことがあるため、全体をきちんと把握することは難しいことです。また、大学は事務局組織とは別に教官組織というものを持っています。現状において、評議会、教授会、各種委員会等の資料を閲覧したり、収集保存することは多くの困難が伴います。

大学の機構上の特殊な制約ということを認識した上で、公文書館による公文書の収集というものはどのように考えていくべきであるかについて次に考えてみます。公文書館への文書の移管を考えたとき、前提として「現用」、「非現用」という概念が必要になります。何故ならば、公文書館法において、「公文書等」とは、国又は地方公共団体が保管する公文書その他の記録と規定してありますが、その次にかっこ書きで、「現用のものを除く」とあります。つまり、現用のものは公文書館の保存、収集対象ではないといっているわけです。

そこで現用・非現用とはいったい何であるかという問題が生じます。国立公文書館の報告書の考え方では、現用とは作成原課において業務利用者の利用状況の下にある文書ということになっています。また、非現用は、行政的な利用を一応離れ公文書館に移管されたものということになります。いずれにしてもあいまいな表現であるため、その中間にどうしても半現用といった状態が生じることになります。つまり、作成原課から文書課の管理に移った段階、要するに原課の手を離れた状態のことです。

なぜこのようにあいまいな表現になるのかというと、文書の完結、すなわち「その文書が携わっている案件が終了したとき」が即、非現用ということにはならないからです。常識的に考えても、一度完結した文書はもう使わないのかというと、決してそのようなことはなく、何らかの必要があり、再び行政的な観点から利用されることがあります。それではどこでその線引きをするか、どの段階で公文書は公文書館に移管されるべきかという問題になりますが、このことについて、史料管理学では、文書の生成、保存、廃棄といったプロセスを考えて、「文書のライフサイクル」というとらえかたをします。

永年保存文書については、現用文書であった時期を終えると、保管され、段々利用度が低下していくプロセスがあります。つまり半現用の段階です。この半現用の段階がどこで終了するという一定の基準はなく、この文書はもう公文書館に入れてもいいだろうという判断が下された状態で歴史資料として公文書館に移管されることになります。しかしながら、これも20年、30年経って行政的な観点から全く利用されないか、言いかえれば現用的な価値はどこかの段階において全くなくなってしまうのかというと、決してそのようなことはありません。永年保存文書は常に潜在的には現用文書である可能性を含んでいます。そうなれば、現



（☆10年保存文書は５年で管理委任→５年後に廃棄）

文書の流れ（小暮隆志「公文書受入に関する一試案」より）

用価値を潜在的にしろ含んでいるのだから、それは現用文書であるという考え方、逆に言えば、現用的な価値がなくなることがないから、永年保存文書なのであるという考え方をしてしまえば、絶対に公文書館に移管されることはなくなってしまうことになります。理論的にも微妙で難しい問題であると言えます。

もう一つ、有期限文書の場合ですが、これについては、保存年限が経過した文書は廃棄され、そこで現用価値はなくなり、公文書館行きになるので問題なしかというと、厳密に考えるとそう簡単にはいきません。なぜなら、公文書の管理は法律上の問題を含んでいますが、法律上の廃棄とは文字通り廃棄であり、焼却、溶解、裁断のいずれかしかありません。つまり廃棄された文書というのは物理的に存在しないものであるということになるため、その前の段階で公文書館が選別して受け入れることになります。ところがそうすると、これは廃棄の定義上廃棄されてないわけであるから、まだ廃棄されていない文書は半現用文書であるという言い方もできることになります。現用価値のある文書を公文書館に移管することは、公文書館法に照らし合わせれば矛盾することになってしまいます。

実際のところ、公文書の移管についてはこのように難しい問題がありますが、こういった問題に対し、最近の史料管理学では、従来の廃棄概念を変えることで対応するようになってきているようです。つまり、保存文書庫から外すことで廃棄したと考え、現物を抹消しなくてもよいという考え方です。極端に言えば、保存文書台帳から削除された段階でもうそれは公文書ではなく、歴史資料だということであり、現在ではその考え方をもって公文書の移管を行うようになっています。

この考え方、つまり、廃棄された段階でそれはもはや歴史資料であり、行政文書ではないという考え方をもってすれば、その時点で行政的な利用はできないことになります。従って当然、行政的には情報公開制度の対象にはならないことになりますが、現実には必ずしもそうではないケースもあります。つまり、有期限文書については、受入れ後一定期間を経過すれば、どの公文書館においてもその文書館の規程により公開されることで一致していますが、永年保存文書については、受入れ後も情報公開制度の適用により公開されたり、文書館規程により公開されたりとそれぞれの文書館ごとに取り扱いが異なるのです。

なぜこのようなことが生じるかというと、先ほども述べたとおり、理論上では永年保存文書は永久に現用だという立場が一方にあります。その立場からは、文書の管理権を全面的に公文書館に渡すことはできないことになり、実質的には公文書館が管理しているものであっても、法律的な管理権は本庁にあるために情報公開制度が適用される場合があるのです。この法律的な管理権が公文書館にないという問題のため、永年保存文書について受入れをしていない公文書館も存在しますが、個人的にはこの考え方には問題があると思います。

ともあれ、公文書館への文書の移管には難しい問題が内包されています。しかし、公文書の歴史資料としての価値の認識に立って、今まで述べてきたような問題点について、史料管理学や文書館の現場の側から様々な考え方、方法が提案され、知見が積み重ねられていることも、ぜひ理解して

頂きたいと思います。本日お話しするにあたって参考にさせて頂いた小暮隆志「公文書受入に関する一試案」(『双文』11号) などは、その貴重な成果であろうと思われます。これは群馬県立文書館のこれまでの蓄積の上に書かれたもので、今日の私の話の後半はこの論文に依拠しています。いずれにしても、完璧な手段というものは未だないにしろ、行政側と文書館側の双方から徐々に弾力的に運用し、なおかつ歴史資料としての保存はきちんとやっていくという形が出来つつあるといえるのでないかと思われます。

冒頭でも申し上げたとおり、大学においても何らかの形で歴史資料としての公文書の保存、そして大学文書館の問題というのは必ずいつかでてくることであり、また議論の必要がある問題です。そういった問題に皆さんが直面された時に、本日申し上げた話を頭の片隅におきながら取り組んでいただければ幸いです。

(大学史料室長 / 大学院比較社会文化研究科教授)

九州大学史料収集・保存に関する委員会名簿

委員長	○比文研	教授	有馬　學
副委員長	○農学部	教授	深尾　清造
副委員長	○石炭研	教授	東定　宣昌
	○文学部	助教授	佐伯　弘次
	○教育学部	助教授	新谷　恭明
	○法学部	教授	直江　眞一
	○経済学部	教授	荻野　喜弘
	○理学部	教授	青木　義和
	○医学部	教授	多田　功
	歯学部	教授	坂井　英隆
	薬学部	教授	前田　稔
	工学部	教授	萩島　哲
	シ情	助教授	正代　隆義
	数理研	助教授	川崎　英文
	総理工	教授	本地　弘之
	生医研	教授	木村　元喜
	応研	教授	高橋　清
	機能研	教授	西村　幸雄
	健セ	助教授	冷川　昭子
	言文	助教授	金子　暢良
	医短	教授	布上　董
	医病	教授	野瀬　善明
	歯病	教授	池本　清海
	生環研	助教授	北野　雅治
	熱研	助教授	林　靜夫
	情セ	助教授	古川　善吾
	アイセ	教授	大崎　進
	中央分析	助教授	坂下　寛文
	遺伝情報	教授	服巻　保幸
	留セ	助教授	岡崎　智己
	有化研	助教授	菊池　純一
	大教セ	助教授	長野　剛
	先端セ	助教授	中島　寛
	○大型	助教授	天野　浩文
	図書館長		小山　勉
	学生部長		柴田洋三郎
	事務局長		牛尾　郁夫

○は専門委員会委員

(1996年12月1日現在)

受贈図書一覧 (1996年7月～12月)

創立三十周年記念論文集　社会学部篇
　流通経済大学出版会　1996. 3

創立三十周年記念論文集　経済学部篇
　流通経済大学出版会　1996. 3

一橋大学百二十年史：Captain of Industry をこえて
　一橋大学　1995. 9

第1回政治史・外交史ゼミナール卒業記念論文集
　石川ゼミナール (九大法学部)　1979. 3

石川ゼミナール　政治論文集　第2号～第18号
　石川ゼミナール　1980. 3～1996. 3

化学センサー：その基礎と応用
　清山哲郎 [ほか] 編　1982. 3

金属酸化物とその触媒作用：無機化学的アプローチ
　清山哲郎　1985. 5

フローチャート上のらくがき：玄海水族翰　抄
　清山哲郎編　1994.10

化学One Point16　化学センサ
　清山哲郎　1992.10
玄海水族翰　第１号～第30号
　清山哲郎　1985．1～1993.12
玄海余滴
　清山哲郎　1985．1～1993.12
金属氧化物及其催化作用
　清山哲郎　1991．4
清山哲郎論文集　XI（補遺３）
　清山哲郎
清流虹：清山哲郎先生の勲二等瑞宝章を祝して
　清山哲郎先生叙勲記念集世話人会　1995．8
東アジア産業技術シンポジウム：科学技術の移転・開発・協力について　《報告書》
　1993.10
大学人からみた九州地域における産業技術の望ましい将来像
　九州産業技術センター　1988．1
21世紀の九州と産業技術：大学人からみた九州地域における産業技術の望ましい将来像
　九州産業技術センター　1993．4
East-Asia Symposium on the Frontiers of Industry　Proceedings
　edited by Hiromichi Arai　1993.10
Global Environment and Energy Issues Proceedings
　edited by Tetsuro Seiyama　1990.11
Global Environment and Energy Issues Supplement of the Proceedings
　edited by Tetsuro Seiyama　1990.11
化学センサー国際会議報告
　化学センサー国際会議組織委員会　1984．3
SURFACE AND NEAR-SURFACE CHEMISTRY OF OXIDE MATERIALS
　edited by JANUSZ NOWOTNY ;
　LOUIS-CLAUDE DUFOUR　1988
Chemical Sensor Technology　Vol. 1、Vol. 2
　edited by Tetsuro Seiyama　1988、1989
Proceedings of the International Meeting on Chemical Sensors
　edited by Tetsuro Seiyama [and others]
　1983
学院史料　Vol. 14
　神戸女学院史料室　1996．5
サティア《あるがまま》　第23号、第24号
　東洋大学井上円了記念学術センター
　1996．7、1996.10
福岡市指定文化財　旧三浦家住宅保存修理工事報告書
　福岡市経済振興局経済部観光課　1996．8
東京大学史紀要　第14号
　東京大学史史料室　1996．3
東京大学史史料室ニュース　第16号、第17号
　東京大学史史料室　1996．3、1996.11
学内広報　No. 1072
　東京大学広報委員会　1996．7
松の実　第31号
　九州大学女子卒業生の会（松の実会）　1996．9
広島県立文書館だより　第８号
　広島県立文書館　1996．9
名古屋大学史資料室ニュース　創刊号
　名古屋大学史資料室　1996．9
県史だより　第82号～第84号
　西日本文化協会　1995.11～1996．3
旧制高等学校記念館：その生い立ちと歩み
　旧制高等学校記念館友の会　1996．4
梅花学園出身のタカラジェンヌ展　展示目録
　梅花学園資料室　1996.10
井上円了センター年報　第５号
　東洋大学井上円了記念学術センター　1996．7
東洋大学人名録　役員・教職員　戦前編
　東洋大学井上円了記念学術センター　1996．3
立石潤教授退官記念業績集
　九州大学医学部附属脳神経病研究施設病理部門
　1996.10
創立百十周年記念　第二高等学校史料展
　東北大学記念資料室　1996.10
攻玉論
　靳明全　1995．5
MUSEUM KYUSHU　第53号、第54号
　博物館等建設推進九州会議　1996．3、1996．8
拓殖大学創立100周年ニュース
　拓殖大学創立百周年記念事業事務局　1996．8
九州大学大型計算機センター25年史
　九州大学大型計算機センター　1996．3
放送大学十年史
　放送大学学園　1994．3
都城高専三十年史
　都城工業高等専門学校　1994.11
富山医科薬科大学開学二十周年記念誌
　富山医科薬科大学　1995.12
大阪体育大学三十年誌
　大阪体育大学　1995.11
金城学院百年史

金城学院　1996．9
前川道郎退官記念講演・著作作品目録
前川道郎先生退官記念事業会　1995.10
新島襄の少年時代：脱国まで
同志社社史資料室　1996.11
福岡県公共図書館郷土資料総合目録　追録８
平成８年版
福岡県立図書館　1996.11
人文論集　第31巻第１号～第３・４号
神戸商科大学学術研究会　1995．9～1996．3
人文論集　第32巻第１号
神戸商科大学学術研究会　1996．8
大乗淑徳学園100周年記念写真集
大乗淑徳学園　1996．6
西日本文化協会30年のあゆみ
西日本文化協会　1991．3
アメリカの教育改革：日米教育協力研究日本側報告書
日米教育協力研究日本側研究グループ　1987．1
留学交流執務ハンドブック　平成７年度
第一法規出版　1995．7
内外学生センター50年史
内外学生センター　1995．8
日学資料３　日本の学術研究環境：研究者の意識調査から－日本学術会議－
日本学術協力財団　1991．5
地球時代の新世紀を拓く人づくりを目指して：教育改革への提言（そのⅡ大学教育の変革を中心として）
関西経済同友会　1994．3
放送大学研究年報　第10号
放送大学　1993．3
明日を拓く名古屋大学：名古屋大学の活動の現況と展望　1992-1993
名古屋大学　1993．1
豊橋技術科学大学における教育と研究（４）
豊橋技術科学大学　1992．4

大学史料室日誌抄録（1996年７月～12月）

7．2（火）　歯学部同窓会より史料寄贈。
7.11（木）　予算経理委員会開催（東定副委員長出席）。
7.19（金）　清山哲郎名誉教授より史料寄贈。
7.23（火）　評議会開催（平成８年度大学史料室予算決定）。
8．5（月）　大学史料室室内改装工事（～９月２日）。
8．6（火）　庶務課より「公文書の移管に関する申合せ（案）」受領。
8.21（水）　企画調査室より史料受領。
9.10（火）　「大学史料室ニュース」第８号刊行。
10．1（火）　平成８年度教育研究特別経費（特別分）「教育研究学内特別経費」交付。
10．7（月）　折田講師、東日本大学史連絡協議会・西日本大学史担当者会合同研究部会参加（～９日。於広島大学）。
10.16（木）　本部秘書掛より史料受領。
11．1（金）　「大学史料室への印刷物の送付について（依頼）」を各部局事務（部）長等へ送付。
11.26（火）　前川道郎名誉教授より史料寄贈。
12.25（水）　庶務課所蔵文書、史料室へ移管（～26日）。
12.27（金）　研究協力課所蔵文書、史料室へ移管。

九州大学大学史料室ニュース　第９号
Archives of Kyushu University

発行日　1997年３月10日（年２回刊）
編集
発行　九州大学大学史料室
〒812-81 福岡市東区箱崎６－10－１
電話（092）642－２２９２
印刷　九州大学印刷所